

平成21年4月20日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520065
 研究課題名（和文） 東アジアにおける漢訳西学書の成立、伝播とその影響に関する思想的
 研究
 研究課題名（英文） A intellectually studies on the Formation, the diffusion and its
 influence of the Chinese Translation Works of Western Learning in
 East Asia
 研究代表者
 李 梁 (RI RYO)
 弘前大学・人文学部・准教授
 研究者番号：20281909

研究成果の概要：

標記の科研費交付による研究成果の概要を次のように報告する。まず2005年10月と2007年6月、国内をはじめ、中国、韓国および台湾の関係学者を招き、弘前大学で国際研究集会を開き、その報告論文を基に、専門著書の編集作業は進行中である。なお、下記学会発表欄に記してあるように、三回にわたって国際学会での研究発表を行い、下記の諸論考を公刊している。なお、国内をはじめ、中国、韓国および南欧での文献史料の研究調査による多くの情報や知見の整理と執筆は進行中である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,000,000	0	1,000,000
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	480,000	3,980,000

研究分野：思想史

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：漢訳西学書、イエズス会、徐光啓、幾何原本、朝鮮西学史

1. 研究開始当初の背景

16世紀末期～18世紀の前半期にかけて、東アジア諸国で布教の手段として、ヨーロッパルネサンス期の科学諸芸という新知識の伝播に最も力をいれたのは、イエズス会である。イエズス会をはじめとするカトリック系各修道会の東アジアにおける布教活動、およびそれに伴う新知識としての漢訳西学書（漢訳洋書、漢訳西書ともいう）の成立、伝播に関する研究は、19世紀の

末からすでに提起されている。その中で、欧米では、史料および言語利用上の便利さもあって、数世紀来、枚挙に暇がないほど夥しい研究成果が生み出されている。それに続いて、明治四十年代頃から日本でも、日本でも明治以降、優れた研究者が輩出し、数多くの優れた研究成果が出されている。たとえば、海老名有道、左伯好郎、山口正之、矢沢利彦、後藤基己、高瀬弘一郎、松田毅一、榎一雄、山田慶児および藪内清などである。そして、中国では、陳垣、向達、

馮承鈞、徐宗澤、張星煊、方豪、韓儒林、朱傑勤、韓振華、孫培良、張広達、朱維錚、李天綱、張西平など、さらに第二次大戦後、韓国では、李元淳、琴章泰、金玉姫などの学者からも相次いで様々な角度から問題提起され、研究に取り組んで今日に至っている。こうした先駆的作業からは数多くの優れた先行業績が生まれ、豊かな蓄積が既存しているというのは、実状である。

だが、一方では、その多くは、或いは宗教信仰の角度から、カトリック布教による接触と衝突に関する教理書というジャンルに傾いているか、或いは個別の一国の事項のみを突出して展開されているか、という有り様だったのは、事実である。これは、中国また韓国の関係研究において、とくに顕著にみられる現象だと言える。日本では、明治中期以来の重厚な蓄積があるが、それにしても、東アジア諸国をある連続的視点で捉えて、かつ有機的な知の連鎖というスタンスからの系統的研究は手薄か殆ど皆無と言ってよいほどである。

つまり、前近代の東アジア地域に存在していた似通った文化的背景、より具体的に言うと、いわゆる漢字文化圏諸国における共通のアカデミー言語としての「漢語」を軸に、16世紀の末期から17世紀の末期にかけての、いわゆる明末清初期の中国で展開された西学の翻訳活動、とりわけ天文、数学をはじめとする諸科学書の漢訳活動、並びにその東アジア諸国への伝播にともなって発生した歴史的、思想的影響についての系統的研究は、まだ殆ど行なわれていなかった。本研究は、まさにそうした研究上の空白の存在に気づき、「漢訳西学書」をキーワードに、かついわゆる「思想的連鎖」という視点から出発して、そうした空白を埋めるべく遂行してきたのである。これは、まさに研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、総じて言えば、16世紀末期から17世紀後半までのおよそ一世紀の長きにわたって、主としてカトリック教派のイエズス会がその布教活動とともに、東アジア諸国にもたらしたヨーロッパルネサンス期の科学技術とその思想がどのような歴史的意味を有するのかを検証することにある。

やや敷衍すれば、すなわち、16世紀末より、フランシスコ・ザビエル(1506~1552)やマテオ・リッチ(1552~1610)を筆頭に、次々と日本、中国および朝鮮半島等の東アジア諸国にやってきたイエズス会宣教師達は、いわば「片手はバイブル、片手は剣」という従来の宣教方式は、深厚な文化伝統

をもつ東アジア諸国には全く通用せず、代わりに、宣教師達は一部の有力な支配者や知識人に好まれる西欧の科学技術とその知識を宣教の手段とせざるをえなかった。それが布教という根本的狙いを一旦棚上げにして、東アジア諸国に、いわば望ましからぬ果実——科学技術とその思想——を落としてしまったのである。当時、東アジア諸国の「ラテン語」とでもいうべき漢語(漢文)という通用語が存在する。それが数学、天文学、地理学、建築および銃砲製造術といった科学技術を中心とする漢訳西学書の成立とその伝播を可能にせしめた重要な知的与件だったのである。

具体的に言えば、以下の幾つかをテーマごとに挙げられる。まず、16世紀末から17世紀後半までの、いわば早期近代の東アジア諸国において、主としてイエズス会によるヨーロッパルネサンス期の科学技術諸芸の翻訳活動は、どれほどの成果を残しているのかを総合的に明らかにする。それから、そうした知的営為は、またどのような歴史的、社会的背景のもとに行われたのかを幾つかの重要テキスト——たとえば『幾何原本』、『圓容較義』、『天問略』など——をとおして実証的に浮き彫りにする。なお、科学技術書を中心とする漢訳西学書は、漢字文化圏に属する東アジア諸国に、いつ、どのように伝播され、それぞれの社会にどんな思想的影響を与えたのかを多角的に検証する。そして、そうした歴史的、思想的影響によって、当時の東アジア諸国(主として日、中、韓三国)の間に、どのような「知的連鎖」または「思想的連鎖」が形成されたのかを考察し、その実態を科学技術とその思想の伝播という角度から解明する。

さらに、こうした研究の延長として、次の課題を新たに設定して研究の一層深化を図っていく。すなわち、近世初期から始まったカトリック諸教派による布教活動とともに、とくに東アジア諸国での学校設立とその教育実践の活動によって、当地域で一種の新たなローカルな知識体系が構築された意義を歴史的に検証し、またそれが、後に東アジア諸国の近代にどのような知的土台を用意し、さらに言えば、今日にとってどのような現代史的意義をもつのかといった問題群を更なる研鑽によって解明する。

3. 研究の方法

当研究課題は、複数の学問分野——例えば、歴史学、文献学、言語学、思想史並びに翻訳理論——に及んでいるのみならず、また時間的にも空間的にもかなり広がっている。そこ

で、研究方法の基本的スタンスとしては、何よりもまず、時代および取り扱う文献史料（漢訳西学書）の分野の限定を行うことである。

(1) 16世紀末期から17世紀末期までの、広い意味の明末清初期を取り扱う時代として画定する。その中で、さらに具体的な歴史的な文脈に沿って、前後にして2つの時期を設ける。すなわち、マテオ・リッチ (Matteo Ricci, 1553—1610) が入明した1583年(明萬曆10年)からフェルビースト (Ferdinand Verbiest, 1623—1688) が逝去した康熙27年を第一期とする。そして、フランス国王ルイ十四世から派遣されたブーヴェ (Joach Bouvet, 1656—1730)、ジョルビヨン (Joan-François Gerbillon, 1654—1701)らパリ外国宣教会 (Société des Missions Etrangères) が来清した1687年(清康熙26年)から康熙期の「典礼論争」をへて、1747年(乾隆12年)の乾隆禁教諭旨の頒布 (『清高宗実録』巻275, 第20頁)までを第二期とする。なお、当研究課題の取り扱う範囲外となるが、それ以後より近代までを第三期とする。

(2) そして、宗教教義書以外の哲学、論理学を含む広い意味の科学技術書、とりわけ数学と天文学書を主な考察対象とする。それは無論、方法論的意味合いを込めているが、それ以上に、事実、16世紀末から17世紀の前期にかけて、東アジア諸国では、相次いで、キリシタン禁制に乗り出し、とくに日本、李氏朝鮮のように、宗教教理書は勿論、科学技術書すら厳しく禁止の対象とされたため、漢訳西学書の伝播とその思想的影響が時期によっては極めて実現困難な局面に立たされていたというのは、歴史的事実だったからである。だが、その一方では、16世紀末から東アジア諸国で相次いで展開された経世済民、利用厚生という「実学運動」と連動して、かなりの広がりと思料的浸透をみせた西学運動は、いくらキリシタンの禁制があったとはいえ、やはり多方面にわたって、様々な形でいろんな痕跡を残しているはずである。その意味で、本研究は、最初から、そうした複雑さや多様性をもつ歴史的な文脈を有するものである。

(3) こうした基本的スタンスに立って、まず画定した時代における漢訳西学書の文献史料とその書誌的情報、並びに所蔵状況を網羅的に収集する。そして、まず、漢訳西学書の成立する歴史的、社会的背景を立体的に考察し浮き彫りにする。それらを分野別に整理し、書誌的情報に対する吟味、分析とともに、リストアップする。そうした作業は、中国(香港、台湾およびマカオを含む)をはじめ、日本と韓国ないし欧州(とくに南欧のポルトガルとスペイン)における各公私および教会関係の図書館、古文書館などで行なわれる。そ

して、それら漢訳西学書に対する緻密な読み込みや分析によって、とくに重要と思われる書籍—たとえば、『幾何原本』、『渾蓋通憲図説』と『天問略』—を中心に、当該漢訳書の底本、原本書の調査をも同時に行なわれる。なお、こうして博搜した文献資料の情報を整理し分析を行う。そして、『幾何原本』のような重要な書籍に対する綿密な読み込み、分析によって、とくに概念(テクニカルターム)の翻訳とその定着を多角的に検証する。とその流布の角度から、漢訳西学書の東アジアでの伝播、およびその思想史的影響を考察する。

4. 研究成果

前述したように、早期近代の東アジアにおける特異な歴史的な事象としての漢訳西学書に対する研究が今迄、欧米および日中韓の学者の努力によって、かなり重厚な研究蓄積があったというのは事実である。しかし、そのいずれも、いわば、東アジアという思想的連鎖という視点から、漢訳西学書の成立、伝播および歴史的な影響といった体系的、実証的研究は殆ど見られなかったというのも、また事実である。本研究成果として、なによりも、まずそうした新たな研究視点の提示、とくに従来の宗教的、哲学の観念論的アプローチと異なり、主として科学技術書の翻訳(書誌的情報の解明、概念の生成と定着)という知識論の実証研究を通して、早期近代の東アジア社会における知的連鎖の実態とその歴史的意義を浮き彫りにしたことを挙げられる。

それから、こうした書誌的研究のもとで、とくに重要な漢訳西学書と思われる『幾何原本』の翻訳研究、とりわけ点、線、面といった幾何学の数学概念の翻訳、生成と定着、さらに『幾何原本』にみえた厳密な演繹思想および公理思想をいかに漢文文脈に置き換えられたのかといった重要な問題群を提起し、その原理的な解明の一步を踏み出したのである。これは、将来の更なる研究の深化に繋がり、より一層豊穡な思想研究の可能性を見いだせるものだと信じる。

むろん、全貌の解明や研究自体の検証はまだ途中段階であると言わなければならない。しかしながら、当研究のさらなる遂行、深化に従い、従来の研究では、殆ど例外なく見落とされたある歴史的な事象に気づいたのである。すなわち、漢訳西学書の伝播によって、東アジアにおいて、新たなローカルな知識体系(知識構造、価値観並びに認識論)が構築されて、やがてそれが、当地域における伝統的知識体系と拮抗しながら、様々な新たな思想的現象を産みだし、後世の歴史社会の有り様を大きく左右するようになったことが認められる。その意味で、従来の研究の更なる深化と広がりとを図ろうとするため、目下、

東アジア三国において、時代的に多少前後する代表的知識人 新井白石、徐光啓、および洪大容にスポットを当てて、そうした新しい研究課題に取り組んでいるところである。これも、当研究成果の延長の一環として挙げられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 李梁「韓国所蔵漢訳西学書に関する書誌的考察(下)」弘前大学人文学部『人文社会論叢』(人文科学篇)第20号、2008年8月、査読無、67～83頁。

② 李梁「東海西海 心同理同——紀念徐光啓及『幾何原本』翻譯四百周年国際研討会側記」、国際科学史與科学哲学聯合会科学史組中華民国委員会『科学史通訊』第三十一期、中華民國九十七(2008)年五月、61～68頁、査読有。

③ 李梁「韓国所蔵漢訳西学書に関する書誌的考察(上)」弘前大学人文学部『人文社会論叢』(人文科学篇)第19号、2008年2月、査読無、17～29頁。

[学会発表] (計5件)

① 李梁「コインブラから東アジアへー近世東アジアにおける新知識体系をめぐってー」、2008年11月18日、国際研究集会「東アジア近代における概念と知の再編成」、京都・国際日本文化研究センター

② 李梁「『幾何原本』的成立及其在東亞的傳播—以概念的翻譯與公理思想為中心—」、2007年11月9日、中国上海斯波特大酒店(中国復旦大学、上海交通大学、アメリカサンフランシスコ大学マテオ・リッチ中西文化研究所および上海徐家匯区文化局の共催)

③ 李梁「概念の翻譯と生成—『幾何原本』第一卷「界說公理」を中心にして—」、国際シンポジウム「文化の往還—東アジアにおける近代諸概念の生成と展開」、2007年10月17日、中国北京大学(中国北京大学と日本人間文化研究機構との共催)

④ 李梁「韓国所蔵漢訳西学書に関する書誌的考察」国際研究集会「国際研究集会「近世東アジアの多様な方向性」、2007年6月29日、弘前大学(弘前大学人文学部国際研究集会プロジェクトチーム主催)

⑤ 李梁「歴史と翻譯——漢訳西学書の成立とその思想史上の意義」、国際研究集会「歴史・言語・思想—明清交替期(16th～18th)の東アジアと西洋との遭遇」、2005年10月28日、弘前大学(弘前大学人文学部国際研究集会プロジェクトチーム主催)

[図書] (計1件)

① 宋浩傑 編『『幾何原本』的成立及其在東亞的傳播—以概念的翻譯與公理思想為中心—』、『紀念徐光啓及「幾何原本」翻譯四百周年国際研討会論文集』、上海古籍出版社(2009年秋出版、印刷中)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1)研究代表者

李 梁 (RI RYO)

弘前大学・人文学部・准教授

研究者番号：20281909

(2)研究分担者

(3)連携研究者